

未調査資料の整理・研究と地域還元 ——五戸町所蔵「圓子家文書」を素材として——

古 川 祐 貴¹

はじめに

本プロジェクト事業は、筆者が青森県五戸町から委託を受けている受託研究を補完する目的で実施するものである。弘前大学は令和5年（2023）4月14日に五戸町と「五戸町と国立大学法人弘前大学との連携協力に関する協定書」を締結し、様々な分野において「相互の密接な連携と協力」を行うこととした²。筆者が委託を受けている受託研究も連携協力事項の一つとして位置付けられ、五戸町が所蔵する「圓子家文書」の調査をメインとするものである。

受託研究期間は8ヶ年（予定）で、「圓子家文書」を含む1万点超の歴史資料（古文書）を整理・研究する。最終的には古文書1点ごとの詳細なリスト（＝目録）とそれらを用いた研究論文を掲載した報告書を完成させるとともに、ごのへ郷土館での特別展示や地域住民向けシンポジウムも開催する。このような受託研究を補完する目的を持つ本プロジェクト事業では、本学学生の積極的な参加を促そうとするものである。以下、本プロジェクト事業の成り立ちについて受託研究の経緯と併せて見ておこう。

1、背景と目的

そもそも受託研究は、令和3年（2021）11月に本学八戸サテライトより依頼を受けたことに始まる。八戸サテライトでは五戸町が膨大な古文書を有しながらも、専門家不在のために死蔵せざるを得ない状況にあることを把握していた。筆者は八戸サテライトから依頼を受けたことで、まもなく五戸町所蔵の古文書を視察しに行くこととなる。保管状況をごのへ郷土館で確認すると、そこには古文書がぎっしりと詰まった段ボール箱がおよそ50箱積み上げられていた。これが「圓子家文書」であり、調査してもらいたい古文書は他にも数千点あるという。案内してくれた村本恵一郎氏（同町教育委員会教育課社会教育班長・当時）と協議に入り、令和4年（2022）度いっぱいをかけて準備を行い、翌5年（2023）4月より受託研究として筆者が受け入れることが決まった。

最も考えなければならなかったのはマン・パワーの問題であった。「圓子家文書」だけでも1万点を超えると言われており、到底独力では調査することができない。そこで筆者は専門家を集めたチームを作ることを五戸町に提案し、令和4年（2022）8月に「五戸町歴史資料等整理検討委員会」として発足したのである。発起人の筆者が委員長となり、鈴木淳世氏（東北大学東北アジア研究センター学術研究員）が副委員長に、藤田俊雄氏（青森県文化財保護審議会副会長）・熊谷隆次氏（八戸工業大学第二高等学校教諭）・中野渡一耕氏（青森県環境生活部環境政策課総括主幹）・滝尻侑貴氏（八戸市立図書館歴史資料グループ主査兼学芸員）が委員に委嘱された。五戸町教育委員会が委嘱する委員会として発足したことからも分か

¹ 弘前大学人文社会科学部

² 「五戸町と国立大学法人弘前大学との連携協力に関する協定書」第1条

るように、準備期間の令和4年（2022）度は五戸町の直営事業として進められたのである。

令和4年（2022）8月11～12日に第1回検討委員会を開催した。学生時代に「圓子家文書」を調査したことがある熊谷委員に圓子家に関するレクチャーをお願いし、「圓子家文書」の現況に関する意見交換を行った。また筆者が作成した受託研究の「全体計画（案）」および「歴史資料等整理方針（案）」を共有し、調査の全体像と調査方針について確認し合っていた。こうした確認作業は第2回検討委員会（令和4年〔2022〕9月18～19日）、第3回検討委員会（令和5年〔2023〕2月23～24日）でも繰り返し行われた。第2回・第3回検討委員会では、委員全員で予備調査にも着手し、実地で計画や方針のブラッシュアップを行っていた。必要な備品・消耗品の洗い出しもできたことは言うまでもない。「圓子家文書」に関わる場所の視察・巡見も行った。視察・巡見先は旧圓子家住宅（県重宝）・五戸代官所跡などである。

このようなかたちで3度の検討委員会を開催し、翌年度に向けての準備を行っていたが、受託研究の予算（委託料）積み上げがかなりの額に上っていることが判明した。備品・消耗品費が嵩んだのは当然のことであったが、マン・パワーの問題が依然としてあり、近隣の自治体学芸員や専門家、青森県外の大学院で日本史学を専攻する大学院生にも積極的に声を掛けていたからである。マン・パワーの問題は調査に直接影響することから、これらの経費を五戸町に認めてもらい、人件費・旅費として計上することとなった。

しかし、それでも筆者は不安であったことから、自身が指導する日本史研究室のゼミ生（学部生）を参加させることを考案した。目的は3つ。1つはマン・パワー問題の解消につながることで、2つは実地で調査を行うことで理屈では理解できない調査技術を身に付けることができることで、そして3つは多様な人材との交流の中で調査すること・連携することの意義に気が付くことで、である。特に3つ目の目的は大学の授業の中で実現することは難しいものであるため、大変良い機会だと思った。ただ学部生を参加させることは学生教育にとって意味があるものであり、受託研究の成果に直結するものではない。ゆえに予算（委託料）として積み上げることは憚れ、別のところから予算を持ってくる必要性を感じた。本プロジェクト事業は、まさにこのような経緯のもとに考案されたのである。ゼミ生全員を連れて行くわけにはいかなかったことから、過去に別の受託研究で古文書調査のアルバイトをしたことのある2名を選抜した。

令和5年（2023）度から開始される受託研究の調査は、検討委員会のメンバー＋近隣の自治体学芸員・専門家＋県外の大学院生＋本学学部生という構成で開始されることとなった。

2、実 施 内 容

令和5年（2023）4月に「五戸町と国立大学法人弘前大学との連携協力に関する協定書」が締結され、受託研究が始まった。現時点（令和6年1月）までに実施した調査は2回である。

（1）第1回調査

令和5年（2023）8月8～12日にかけて、五戸町立公民館で行った。初日は13時に現地集合し、まもなく調査が開始されたが、受託研究の第1回調査ということもあって、五戸町長・若宮佳一氏より挨拶があった。その後、参加者全員で筆者が作成した「全体計画」と「歴史資料等整理方針」を確認し、調査に取り掛かることとなった。委員長である筆者と副委員長である鈴木氏が2つのテーブルに分かれて座り、参加者と整理方針を確認し合いながら調査を進めていった。

Excelで作成されたフォーマットに必要事項を逐一入力していく方式をとった。一人あたりの調査目標点数は30点／日であり、一調査あたり800点を指すものである。初日こそ午後に始まり、試行錯誤が続いたが、2日目以降は開始の9時から調査ペースを掴み、効率よく調査が進められていった。結果、第1回調査にして、目標点数を大きく超える1200点の調査を完了させることができた。ただ対象とした箱1～5（「圓子家文書」50箱のうち）には、過去に別の団体が調査したものが多数含まれていたり、比較

的調査しやすい古文書が多かったりしたといった「幸運」にも恵まれたことは否めない。また第1回調査ということもあって、参加人数が多かったことも目標点数を大きく押し上げる要因となったのだろう（総延べ人数40人、うち9人が本学学部生）。成果に甘んじることなく、要因をきちんと分析して解散することとした。

期間中、参加者全員で町内にある高良神社を訪れたことも思い出深い。当該神社にはアダム・ラクスマンが来日したときの様子が描かれた絵馬が奉納されている。ラクスマンとはロシア帝国の軍人であり、ロシアに漂流した大黒屋光太夫らを送還するために寛政4年（1792）にネムロ（根室）に来航した人物である。絵馬は松前滞在中のラクスマン一行を描いたものと考えられ、翌年には盛岡藩士（？）の手を通じて高良神社に奉納されたと思しい。海のない五戸において何故絵馬が奉納されているのか、その後蝦夷地警備に駆り出される盛岡藩と何らかの関係があるのかといった疑問がいくつも湧き、対応して下さった総代・氏子の皆様と意見を交わすことができた。直接「圓子家文書」と関係するものではなかったが、圓子家が給人として支配した五戸という地域も蝦夷地警備といった事態に否応なくからめとられていた事実を示す貴重な資料である可能性がある。絵馬という形ではないが、全国にはこうした構図の美術工芸品がいくつも伝来しており、それらとの比較検討から高良神社絵馬の意義を追究するのも面白いだろう。地域の貴重な資源であることに変わりはないことから、ごのへ郷土館での展示や地域住民向けシンポジウムなどで触れる機会があればと感じた次第である。

（2）第2回調査

令和5年（2023）11月10～12日にかけて、ごのへ郷土館にて実施した。朝9時に現地集合し、17時までの調査を3日間繰り返し行った。第1回調査に比べ調査日数および参加人数が少なかったが（総延べ人数18人、うち6人が本学学部生）、計600点の調査を完了させることができた。調査対象としたのは箱6～10であり、第1回調査の続きであった。中には襖の裏張りに使われていた古文書が剥がされて詰め込まれたダンボール箱があり、解読するためには古文書1点ずつに仕分ける必要がある。襖の裏張りに使われていた時点で元々残す意志がなかったことが窺えるが、そうした古文書を調査するためには倍以上の時間と労力がかかる。現時点ではこれらを保留とし、できるところから調査を進めていくこととした。全体像の把握を優先し、残り時間で、全員でもって、保留古文書を調査するといった方針である。古文書調査は基本個人プレーが多いが、その都度協議し、意見を出し合える環境が整ったのは幸運以外の何ものでもなかった。

年度内には第3回調査が控えており、令和6年（2024）2月28日～3月3日にかけて、五戸町図書館で行う予定である。

おわりに

以上からも明らかなように、受託研究の初年度調査は順調に進行している。まだ第3回調査が控えているが、第1回調査と同規模で実施する予定であることから、同程度の成果が見込めるものと考えている。学部生も筆者とともにほぼ全工程に参加できており、本プロジェクト事業の目的もある程度達成できているように思われる。

第3回調査の際に筆者は町長・教育長に対して、今年度調査の成果報告に赴く。その際に調査が順調に進行していることは勿論、地域未来創生センターからプロジェクト費用を取得し、本学学部生の「教育の場」となっていることも併せて報告するつもりである。連携協定締結式や第1回調査の際には東奥日報社やデーリー東北新聞社から取材をいただいた。今後は受託研究自体が「教育の場」となっていることも含めて発信していきたい。まだ始まったばかりだが、これからも学生とともに調査を進めていきたいと考えている。

〔付記〕

新聞記事の掲載をご許可いただいた東奥日報社に感謝申し上げたい。

東奥日報 2023年（令和5年）4月15日

東奥日報 2023年（令和5年）8月9日

Ⅱ.1

未調査資料の整理・研究と地域還元
——五戸町所蔵「圓子家文書」を素材として——